

複数会話文の引用

— 文体とのかかわりにおいて —

山口 康子

一、

本来、会話というものは、原則的に、一つの場に話し手と聞き手が存在し、交互にその役割を交替して成立するものである。従って文学作品においても、しばしば複数の会話文がひきつづいてあらわれ、一まとまりの表現として記されることが多いのも当然といえよう。事実、文学作品における会話文は、一般に、作品全体に万遍なく散在することはなく、ある特定の場面に偏って集中的に引用されている。文学作品の文体を考える場合、作品全体の中で会話文のあらわれ方、すなわち、会話文が作品中のどの部分にどの程度どんな形式で引用されているかを知ることが、文体の解明の一つの手がかりとなり得よう。

例えば、『竹取物語』冒頭、「かぐや姫発見」の場面は次の如くである。

翁いふやう、「我あさごと夕ごとに見る竹の中におはするに
て知りぬ。子となり給ふべき人なめり」とて、手にうち入れ
て家へ持ちて来ぬ。妻の女にあづけて養はず。

山口：複数会話文の引用

(岩波古典文学大系9・29ページ。以下、特に記さない限り、本文引用はすべて、岩波古典文学大系本による。)

かぐや姫を連れ帰り「妻の女にあづけて養はず」段取りになるまでに交わされたに違いない翁と姫の多数のやりとりは、一切描写の表面にあらわれてこない。文学作品の場合、会話文をどこにどう引用するかは、全面的に作者の表現意識に拠るのである。

以上のように考えるならば、複数会話文の引用方法を手がかりに、文学作品の文体の一側面を把握することが可能であろう。会話文引用の多寡や、個々の引用形式と文体との関わりについては既に先学^(注1)に論があるが、会話文の本質を考え、その複数引用に着目したい。以下、複数の会話文を一まとまりの表現として引用する形式について、『竹取物語』を中心に平安和文を調査して(1)引用形式の類型を見出し、(2)それぞれの特徴を知って、(3)文体とのかかわりを見究めたい。

二、

個々の会話文は、普通、引用助詞トなどによって統括され、引用動詞イフなどによって地の文の中に位置づけられているのが一般の引用形式であり、^(注)複数の会話文の一まとまりの引用の場合も、個々の会話文はその形式に従っている。その上で複数の会話文が一まとまりになる方法として、①地の文の一文の中に複数の会話文が連続して引用される場合と、②一文に一会話文を持つ地の文が継起的に複数、間断なくあらわれる場合とがある。以下、例文によってそれぞれの特質を考える。例文は主として『竹取物語』を用いる。

二・1 連続引用

〈例文1〉

これを見て、①「あが佛、なに事思ひたまふぞ。思すらんこと何ごとぞ」と言へば、②「思ふこともなし。物なん心ほそくおぼゆる」と言へば、翁、③「月な見給ひそ。これを見給へば、物思す気色はあるぞ」と言へば、④「いかで月を見給はあらん」とて、猶月出づれば、出でるつゝなげき思へり。

〔竹取〕大系本59ページ、①〜④会話番号、||主語、
~~~~引用動詞、以下同じ。〕

〈例文1〉は、①〜④の計四会話文が連続的に引用されている一文である。十五夜が近づくにつれて深まるかぐや姫の悩みと竹取翁の心配を示す一連の会話文であるが、一文中に、「問と答」「禁止と反論」の二回の応答を一括引用することによって、筆者がそれを一まとまりの事柄として把握・表現していることを明確

な形で示している引用形式である。

このような引用形式を連続引用と呼ぶ。連続引用は、一連の会話文を一まとまりのものとして明確に認識・把握した筆者の立場の反映として把握ことができ、複数の会話文に筆者が秩序を与え、明瞭な引用意識が示されている形式といえることができる。

## 二・2 継起引用

### 〈例文2〉

1. かかるに、大納言まどひて、①「またかゝるわびしき目見ず。いかならんとするぞ」との給ふ。2. 揖取答へて申す。②「こゝら舟に乗りてまかりありくに、またかくわびしき目を見ず。御舟海の底に入らずは、神落ちかゝりぬべし。もし幸に神の救あらば、南の海に吹かれおはしぬべし。うたてある主のみもとに仕うまつりて、すゞろなる死をすべかめるかな」と、揖取泣く。3. 大納言これを聞きての給はく、③「船に乗りては、揖取の申すことをこそ、高き山と頼め。などかく頼もしげなく申すぞ」と、青反吐をつきての給ふ。4. 揖取答へて申す。④「神ならねば、なに業を仕うまつらむ。風吹き、浪激しけれども、かみさへ頂に落ちかゝるやうなるは、龍を殺さんと求め給へばあるなり。はやてもりうの吹かする也。はや神に祈りたまへ」と言ふ。

〔竹取〕47ページ、1.〜4. 文番号、他は〈例文1〉に同じ。〕

〈例文2〉は、「龍の首の玉」における大嵐の描写に続く、大

伴大納言と揖取の応答の場面で、会話文①～④を引用する計四文から成り立つ。嵐にもまれる船上での二人の人物の交互の会話「質問―答」「詰問―弁解」の一まとまりの表現であるが、一文に一会話文が引用され、それぞれ文として完結している。

このような引用形式を継起引用と呼ぶ。継起引用においては、会話文は一回ごとに引用動詞によって明瞭に地の文中に位置づけられ、個々の文も又明瞭に完結している。そういう文だけが複数引き続いてあらわれる形式である。

ところで、会話というものは、一つの発話が終了したあと、引き続き次の発話があるかどうかは本来わからないものである。問いかけても必ず答えられるとは限らない。会話文がそもそも一つの表現として独立していることを考えると、その引用に際して、一まとまりのものといえども一回ごとに個々を完結させて引用する継起引用の方法は、前記、連続引用に比し、会話の実態に即した素朴なものといえることができる。

## 二・3 羅列引用

『竹取物語』全一七三例(注3)の会話文のうち、一例だけ、会話文のみが投げ出されている用例がある。(注4)上接・下接いづれにも引用動詞を持たず、引用動詞さえない。このような場合には、地の文中における会話文の位置づけは非常に不安定になる。更に一例、引用動詞も引用動詞も持たないが会話文の主語だけは示されている用例が一例あるが(注5)、この場合も同様に地の文中での位置は不安定である。このように引用動詞も引用動詞も持たず、場合によっては会話文の主体だけは示されることのある引用形式

を、今、「投げ出し引用」と名づければ、この「投げ出し引用」の会話文が複数、羅列されると、あたかも戯曲台本の如きものになって、独得の文体効果をあらわすようである。次に、この引用形式の多い『宇津保物語』から例文をひいてみよう。

### 〈例文3〉

1. 北方、①「いとほしき事かな。などかは、さ物し給はざりし。いさゝかなる事は仕うまつりてまし物を。いま、よからずとも、御装束は調じて奉り侍らん」
2. 祐宗、②「いとうれしきことかな。いにしへの御勢のやうにもおはしまさざるをなん。いまも同じこと、御とくは劣り給はざるを、なかかはさものし給はざらん」
3. 北方、③「おもふやうにもあらずや」などいひて④「いさゝかなる事、謀り聞えん、とてぞや。人にはの給はじとてなん」
4. 祐宗、⑤「仰事は、なにかは否び聞えん」(『宇津保』(一)忠こそ、137ページ)

〈例文3〉は、橋千蔭の北方が継子忠こそをおとしいれようと、祐宗という「博打不行」の男をかたらっている場面で、北方と祐宗の一連の会話の一部分である。①～⑤の会話文のうち、③④は北方のひきつづいての発話で、実質的には両者の四回の会話に記されている。二人の「献辞―謝辞」「依頼―受諾」の応答であるが、③以外はすべて引用動詞を持たない会話文で、あたかも戯曲の台本のように会話文がそのまま投げ出され、羅列されている。

このような引用形式と羅列引用と呼ぶ。すなわち、「投げ出し引用」の会話文が複数連続する引用形式である。(注6)この場合、文の認定は甚しく困難になるが、地の文によって連結されない限

り、原則的には一人の話者による会話文が一文を形成しているとみるべきであろう。従って〈例文3〉は、1.、4.の計四文から成るとみる。会話文を、その主語のみ記して引用動詞なしに投げ出し、羅列するこの引用形式は、会話文相互の秩序づけも地の文への位置づけもなされていない未熟な文章表現であり、会話文の複数引用としてはもつとも素朴単純な形式である。(注7)

## 二・4 二重引用

### 〈例文4〉

1. をの／＼仰承はりて、まかり出でぬ。2. 『龍の頭の玉取りえずは、帰り来な』とのたまへば、いづちもいづちも、足の向きたらん方へいなんす。かゝるすき事したまふこと」と、そしりあへり。(『竹取』46ページ)

〈例文4〉は、「龍の首の玉」を求めて大納言家の男たちが出發する場面で、男たちの言葉の中に更に『』で示した大納言の命令が大納言の発話のままの形でそのまま引用され、地の文に対して二重の引用になっている。大納言の命令を口写しに引用することによって、龍の首の玉にかける大納言の熱意が如実に示され、命令を受けた男たちの動揺も、より理解しやすくなっている。

このような引用形式を二重引用と呼ぶ。これは、地の文に対して重層的な構造を持つわけであるから、同じく複数会話の一まとまりの引用とはいっても、前三者と同質ではない。地の文から離れて異なる時空に読者を連れ出す働きを持つ引用形式といえるが、この点については既に述べたことがあるので詳述しない。(注8)

## 三、

複数の会話文を一まとまりのものとして引用する形式として四種の類型を見出すことができた。この四種のうち、(一)連続引用、(二)継起引用、(三)羅列引用、の三種は、一連の複数会話文を地の文中に並列的に引用する形式であり、その並列の方法に差異が認められるものである。(注9) (四)二重引用は、地の文に引用された会話文をいわば地として、その内部に更に会話文が引用される形式であり、複数会話文は入子の形で一まとまりになっている。前三者が地の文に対して平面的な並列であるのに対して、後一者は立体的な重層の構造を持つ引用といえる。(注10、参照)

会話の交わされている場についていえば、前三者は話し手、聞き手の存在する場、すなわち地の文の場から離れることはできず、あくまでも会話主体の存在する場に支配されるが、後一者にはその制限がない。その場で発話されたものではない会話文を内包するからである。

以上により、会話文の複数引用にみる引用形式の類型を次のように整理することができる。

### A、並列型

(一)連続引用—一文中に複数の会話文が連続的に引用されて一まとまりになっている型。

(二)継起引用—一会話文を引用して完結する文が間断なく継起的にあらわれて一まとまりになっている型。

(三)羅列引用—引用動詞なしに会話文だけが羅列的に提示されて一まとまりになっている型。

B、重層型

(四)二重引用—会話文中に更に会話文が引用されて、地の文に対して二重の形で一まとまりになっている型。

羅列引用には、会話文に直上接して主語や「いらへ」などの語が置かれている場合も含める。

B、重層型は、地の文に対してはあくまでも単一会話文であり、会話文自体の内部的な問題であって、A、並列型とは根本的に性格が異なる。A、並列型の三種はその意味では同質であるが、(例文1・2・3)にみたとおり、同じく四会話文を引用する一連の文章の印象はいちじるしく異なり、そこに表現性の差異をよみとらないわけにはいかない。具体的に並列型の三者はどのような違いがあるのだろうか。以下、その点を考察する。

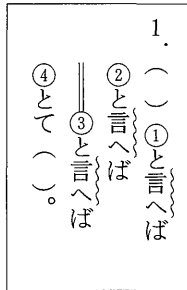
四、

A、並列型の三種の引用形式において、(三)羅列引用は、それを含む文の認定そのもの手がかりが薄く、(二)継起引用は、複数の文の連鎖、(一)連続引用は一文中的問題であるから、文章構造上に差違が生じるのは当然である。その点を明らかにするために、(例文1・2・3)を用いて、引用構造図の作成を試みる。次の符号によってそれぞれの位置を示し、文章の構造を明らかにしてみよう。

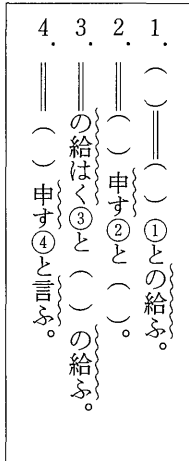
——主語  
 ~~~~~引用動詞

①～④ 会話番号
 () 修飾成分
 1. 4. 文番号

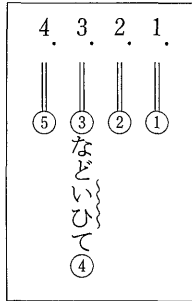
〈例文1〉 連続引用



〈例文2〉 継起引用



〈例文3〉 羅列引用



※〈例文3〉の③④は、同一人物の一会話文を分割して引用したもの。

右の引用構造図を比較すると、いずれも二人の人物のそれぞれ二回ずつ、計四回の会話を一まとまりの表現として並列している事例であるにもかかわらず、三者の文章構造上の差異は明瞭である。

特に、次の二点に注目したい。

- (1) 主語表示数 — 会話文の主体の明文化にみられる差異。
- (2) 引用動詞数 — 引用動詞の延べ語数の差異および異なり語数の差異。

〈例文1・2・3〉について、この二点を整理し、次に表示する。

| 文数 | (2) 延べ引用動詞数
異なり引用動詞数 | | (1) 主語明示数 | |
|----|-------------------------|-----|---------------|---------------|
| | 1 | 1 3 | 1 | 〈例文1〉
(連続) |
| 4 | 3 6 | 4 | 〈例文2〉
(継起) | |
| 4 | 1 1 | 4 | 〈例文3〉
(羅列) | |

表Iの如く、各例文の特徴は明らかであるが、これは、たまたまこの例文に限ってみられる現象ではなく、各引用形式自体の持つ文体的な特色であると考えられる。以下、その点を確認する。

(三) 羅列引用において、引用動詞数が少なくなるのは、「引用動詞を持たず会話文だけが提示される投げ出し引用が複数羅列されている引用形式」という規定から、当然のことである。引用動詞が皆無にならないのは、〈例文3〉にみたように、一つの会話文

表II 『竹取物語』の連続引用・継起引用

| | 継起 | 連続 | |
|---|------|------|-----------------------------------|
| | 24 | 29 | a. 事例数 |
| | 70 | 74 | b. a中の会話数 |
| | 53 | 35 | c. a中の主語表示数 |
| | 96 | 81 | d. a中の引用動詞延べ数 |
| | 7 | 10 | e. dの異なり語数 |
| | 39 | 50 | f. d中のイフの数 |
| 大系本10ページあたりの事例数 | 6.4 | 7.8 | g. 事例出現率 |
| 会話数100に対する主語数 | 75.7 | 47.2 | h. 主語表示率 $\frac{c}{b} \times 100$ |
| 1会話文あたりの引用動詞数 | 1.37 | 1.09 | i. 引用動詞出現率 $\frac{d}{b}$ |
| 1動詞あたりの平均使用回数 | 12.9 | 8.1 | j. 引用動詞異なり度 $\frac{d}{e}$ |
| 引用動詞延べ数に対するイフの比率 | 40.6 | 61.7 | k. イフ率 $\frac{f}{d} \times 100$ |
| (注) 大系本ページ数、37ページ、会話総数173。
ページ数は、見出しなどを除いて、16行組みに換算した。 | | | |

を分割引用する場合や、一連の投げ出し引用ののち、その一まとまりを地の文の中に位置づけるかの如く引用動詞が最後におかれる場合があるからである。引用動詞数が極端に少なくなる以上、会話文の主体を明らかにして話者の交替を示すためには、引用符号「」などを特に示すことのない平安和文においては、主語を明示するしかないのも、主語明示数の増加も又必然の結果である。すなわち、表Iにみた(三)羅列引用の特色 — 主語明示数が多く引

用動詞数が少ない——は、引用形式の規定上必然する文体特色である。

次に、主語明示数・引用動詞数いずれも、(一)連続引用において比較的少なく、(二)継起引用においていずれも比較的多いという特色が、〈例文1〉〈例文2〉の場合に限ったものではなく、それぞれの引用形式自体の持つ文体特色といえることを検討する。この二種の引用形式がほぼ同数みられる『竹取物語』について調査し、前ページ下段、表Ⅱにまとめて示した。

表Ⅱにみるとおり、連続引用においては、主語表示率、引用動詞出現率のいずれについても継起引用に比して低い。表Ⅰにみた特色は、例文に限定されるものではなく、引用形式自体の持つ文体特色と考えられることが判明した。

五、

文学作品においては、右の如き文体特色を持つ四種の引用形式が交々あらわれ、単独に引用される会話文や和歌・消息文・心話文などの引用とあいまって、それぞれ固有の文体を形成している。実際の文章の中にこれらの複数会話文の引用形式があらわれる様相を調べ、その意味を考えてみよう。

〈例文5〉

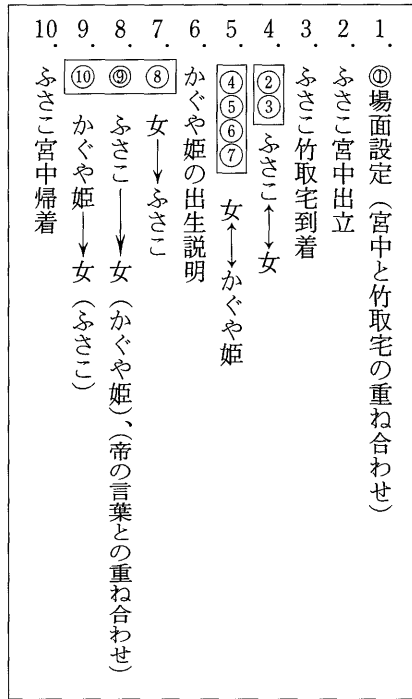
1. さて、かぐや姫、かたちの世に似ずめでたきことを、御門きこしめて、内侍なかとみのふさこにのたまふ、①『多くの人の身をいたづらになしてあはざなるかぐや姫は、いかにばかりの女ぞ』と、まかりて見てまいれ』との給ふ。2. ふ

さこ、うけたまはりてまかれり。3. 竹取の家にかしこまりて請じ入れて、會へり。4. 女に内侍のたまふ。②「仰ごに、かぐや姫のかたち優におはす也、よく見てまいるべき由のたまはせつるになむ、まいりつる」と言へば、③「さらば、かく申し侍らん」と言ひて入りぬ。5. かぐや姫に、④「はや、かの御使に対面し給へ」と言へば、かぐや姫、⑤「よきかたちにもあらず。いかでか見ゆべき」と言へば、⑥「うたてもの給ふかな。御門の御使をば、いかでおるそかにせむ」と言へば、かぐや姫答ふるやう、⑦「御門の召してのたまはん事かしことも思はず」と言ひて、さらに見ゆべくもあらず。6. むめる子のやうにあれど、いと心恥づかしげに、をろそかなるやうに言ひければ、心のままにもえ責めず。7. 女、内侍のもとに帰り出でて、⑧「くちおしく、このおさなきものは、こはくはべるものにて、対面すまじき」と申す。8. 内侍、⑨「必ず見たてまつりてまいれ」と仰事ありつるものを、見たてまつらでは、いかでか帰りまいらむ。国王の仰ごを、まさに世に住み給はん人のうけたまはり給はで有なむや。いはれぬ事なし給ひそ」と、言葉恥づかしく言ひければ、これを聞いて、ましてかぐや姫、聞くべくもあらず。9. ⑩「国王の仰ごを背かば、はや殺し給ひてよかし」と言ふ。10. 此内侍帰り、このよしを奏す。『竹取』53く55ページ)

〈例文5〉は、かぐや姫の評判を聞いた帝が、内侍なかとみのふさこを竹取翁の家につかわされる場面で、内侍の拜命から宮中帰着までを描いた計十文の中に、①く⑩の合計十回の会話文が引用され、複数会話文引用形式の二種四類のうち、(三)羅列引用を除

く三種の引用形式が含まれている。この部分について、地の文における会話文の位置づけ方の構造を图示してみると、次のとおりである。

- 1. ～10. 文番号
- ①～⑩ 会話番号
- ①、② 二重引用



右図にみる各引用形式の出現状況は、決して単なる偶然の結果もしくは無意味な実態ではない。

連続引用②③は、ふさこと姫の会話、同じく④⑤⑥⑦は、姫とかぐや姫の会話で、それぞれ一文にまとめて連続引用形式を採用している意味は明瞭である。

継起引用⑥⑨⑩は、姫 → ⑥ふさこ、⑨ふさこ → ⑩姫、⑩ふさこ → ⑩姫 (かぐや姫) → かぐや姫 → ⑩姫 (ふさこ) と、話し手と話し相手が変わるたびに、それぞれ一文としてまとめてあるが、それには、⑨にお

いて、ふさこの話し相手は場面上は姫ながら実際はかぐや姫へ向かっての発話であり、⑩において、かぐや姫の話し相手は姫であるが実際は内侍ふさこへ向けての発話であるという事情が内蔵されている。実質的にこの場面で行なわれた事は、ふさこ → かぐや姫 の押問答である。姫を仲介として相互に意向を伝えた事は明示しつつ、かつ、同一内容の会話文の反復になるはずの、⑨においては、姫 → かぐや姫、⑩においては、姫 → ⑩ふさこ の会話文を、表現上省略している。発話をすべて記すという方法をとらずに、しかもじかに対座しての押問答ではなく、仲介者としてうろろくと両者の間を往来する姫の姿を髣髴するような描写となり得ているのは、継起引用という形式を採用し、個々の会話文の独立を明示したからであると考えられる。

二重引用①②は、場面として、宮中と竹取翁の家を、時空を超えて重ね合わせる。①は、宮中に竹取翁の家を重ねて場面・状況の設定をなし、②は、逆に、竹取翁の家に宮中を重ねて、内侍ふさこがかぐや姫説得の成功を期して、宮中における帝の発話を自己の発話に重ねて重味を持たせ、事態の進展をはかろうとしていることをあらわしている。

このように、連続引用・継起引用・二重引用が用いられるのはそれぞれ固有の必然性があり、その表現効果が組み合わさって、相乗効果をあげ、文体の特色を形成している。

六、

実際の文字作品においては、各引用形式のあらわれる頻度が異なり、それによって文体印象が大きく異なるであろう。(三)羅

表 III

| 大系
ページ
数本 | 文
数 | 会
話
文
数 | 投
げ
出
し
引
用 | 重層型 | | | | 竹
取 |
|-----------------|--------|------------------|----------------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------------------|
| | | | | 二
重
引
用 | 羅
列
引
用 | 並
列
引
用 | 連
続
引
用 | |
| 39 | 321 | 173 | 2
(1.2) | 12
(6.9) | 0
(0) | 24
(13.9) | 29
(16.8) | |
| 35 | 183 | 96 | 24
(25.0) | 12
(12.5) | 4
(4.2) | 10
(10.4) | 15
(15.6) | 宇
津
保
(忠
こ
そ) |
| 34 | 232 | 85 | 0
(0) | 5
(5.9) | 0
(0) | 7
(8.2) | 23
(27.1) | 源
(未
摘
花)
氏 |

列引用は平安和文においては極めて用例が少なく、特殊な作品に限られるし、(二)継起引用は、『竹取物語』においてこそ前掲表Ⅱにみる如く連続引用とほぼ同数の事例を見出すことができるが、一般にはかなり少ない。平安和文においては、複数会話文の引用は、連続引用形式が主流になっている。そのことを、『竹取物語』『宇津保物語』(忠こそ)、『源氏物語』(未摘花)の三者について比較し、表Ⅲに示す。

(注)

- 1 『宇津保物語』『源氏物語』は巻頭の巻を避け、任意に『竹取物語』とほぼ言語量の同じ巻を選んだ。
- 2 (一)内は、会話文数に対する百分比である。
- 3 参考のため、投げ出し引用会話文数も示した。
- 4 大系本ページ数は、大よそ言語量が等しいことを示す目安であるから、素数で示し、組み方の換算は、行なっていない。

表Ⅲにみるとおり、三作品ともに並列型複数会話文引用では、連続引用がもっとも比率が高く、これをもって主流と認め得る。

更に、平安和文の主要な作品について、連続引用の出現率の実態を次ページ表Ⅳに示した。

歌物語・日記・つくり物語のジャンル別に表示し、大系本ページ数は、連続度・会話度の算出のため、空白の行数などを除き、一ページ十六行組みに換算した。『源氏物語』と、末尾に参考のために示した『今昔物語集』は、余りにも言語量が違うことを考え、『蜻蛉日記』『落窪物語』の古典文学大系本二〇〇ページ余にあわせて、それぞれ、「空蟬々葵」の七巻、巻一・六・十一・三十の四巻を対象として調査した。

C連続例の欄の数値は、会話文が複数(二つ以上)連続引用によって引用されている事例数である。会話度の算出法は、阪倉篤義氏が『物語の文章』の中で示された方法に従ったが、数値については氏の算出されたものと若干の違いがある。引用の認定の差によるものと考えられる。

表Ⅳでわかるとおり、会話文の頻度と、その会話文が連続引用で引用される事例の頻度の相関性を、作品のジャンル別に大まかにとらえることができ、又、個々の作品については、それぞれ独特の相関性を持つことがわかる。複数会話文の引用形式の様相は、その作品の文体特色に深くかかわるのである。

表Ⅳ 平安和文の連続引用

| (卷一・六・十一・三十)
今昔物語集
(源氏物語
(空蝉)葵) | 源氏物語 | 落窪物語 | 竹取物語 | 更級日記 | 和泉式部日記 | 紫式部日記 | 蜻蛉日記 | 土佐日記 | 大和物語 | 伊勢物語 | |
|--|------|------|------|------|--------|-------|------|------|------|------|------------------|
| 242 | 242 | 203 | 37 | 56 | 48 | 67 | 218 | 32 | 96 | 55 | a. 本系大
b. シ数 |
| 844 | 613 | 1114 | 173 | 69 | 89 | 73 | 530 | 48 | 181 | 46 | b. 会話文数 |
| 68 | 119 | 273 | 29 | 13 | 22 | 15 | 102 | 3 | 36 | 1 | c. 連続例 |
| 8.1 | 19.4 | 24.5 | 16.8 | 18.8 | 24.7 | 20.5 | 19.2 | 6.3 | 19.9 | 2.2 | 連続率
c/b × 100 |
| 2.8 | 4.9 | 13.4 | 7.8 | 2.3 | 4.6 | 2.2 | 4.7 | 0.9 | 3.7 | 0.2 | 連続度
c/a × 10 |
| 3.5 | 2.5 | 5.5 | 4.6 | 1.2 | 1.9 | 1.1 | 2.4 | 1.5 | 1.9 | 0.8 | 会話度
b/a |

七、

次に複数会話文引用形式の各作品における全体像を把握し、単独会話文その他の引用文との相関性をも知り得るような「引用図」の作成を試みる。

まず、作品全体を場面によって分け、図の横軸に漢数字で示す。次いでその場面ごとに文に対し番号(文番号)を付し、縦軸に算用数字で示す。その上で、すべての引用文を次の符号によって、引用されている文の番号の欄に記す。

- 会話文、● 投げ出し引用、● 二重引用、○ 心話文、
- × 和歌、△ 消息文その他、

以下、前掲、表Ⅲの、複数会話文の引用の実態の調査に用いた、三資料『竹取物語』『宇津保物語』(忠こそ)『源氏物語』(末摘花)について「引用図」を作成し、比較する。

図Ⅰ、『竹取物語』の引用図

| 場面 | |
|----------|----------|
| 一、かぐや姫発見 | 六、龍の頸の玉 |
| 二、貴公子の求婚 | 七、燕の子安貝 |
| 三、仏の御石の鉢 | 八、帝の求婚 |
| 四、蓬萊の玉の枝 | 九、かぐや姫昇天 |
| 五、火風の皮衣 | 十、富士の山 |

図Ⅱ 『宇津保物語』(忠こそ)の引用図

| 場面 |
|--------------------|
| 一. 忠こそ誕生と母死去 |
| 二. 故左大臣北の方の父千蔭への思慕 |
| 三. 忠こそ成長とあこ君との結婚 |
| 四. 千蔭の北の方疎遠と北の方の焦燥 |
| 五. 北の方の忠こそ誘惑と詐謀の失敗 |
| 六. 再度の詐謀の失敗と父の疑惑 |
| 七. 忠こそその絶望と鞍馬での出家 |
| 八. 事実判明 |
| 九. 北の方の絶縁と零落 |
| 十. 千蔭死去 |

| 場面 |
|---------------------|
| 一. 源氏の状況説明・物語の導入 |
| 二. 末摘花の噂(紹介)と琴の立ち聞き |
| 三. 頭中将の秘密発見 |
| 四. 末摘花をめぐる頭中将との競争 |
| 五. 末摘花との出会い |
| 六. 事後の末摘花の様子と源氏の態度 |
| 七. 雪の朝の発見 |
| 八. 正月の装束の贈り物 |
| 九. 末摘花邸の正月 |
| 十. 二條院での紫上との睦び合い |

図Ⅱ 宇津保物語 引用図

| 行 | 一 | 二 | 三 | 四 | 五 | 六 | 七 | 八 | 九 | 十 |
|----|---|-----------------|-----|-----------------|-------------------------|---------------------|-----------|---------|---------------|---------|
| 1 | | ○ ● | | | | ● | | ○ | | |
| | | | ● ● | × △ ○ | ○ ○ | | ○ | ● | ○ △ × ● △ × | |
| 5 | | △ | ○ | △ × ○ ○ ○ ○ ○ ○ | × ● ○ ○ | | ● ● | ● ● | | ○ |
| | | ○ | | ● ● | ○ ○ | ● ● | ● ● | ● ● | ○ × × × | ● ○ ○ ○ |
| 10 | | × △ | ○ | ● ● ● ● × × | ● | | ● ● | ● ● | ○ × × △ × △ × | |
| | ● | ○ ● | ● | | ● ● ● ● ● ● | ○ ○ | ● ● | ○ ○ | ○ ○ | |
| 15 | | ○ × | | | ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● | ● | ○ ○ | | ● | |
| | ● | ○ ● ● ● ● ● ● ● | | | ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● | ○ ○ | ○ ○ | | | |
| 20 | ○ | ● | | | ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● | ○ ○ | △ × ○ △ × | △ × △ × | | |
| | | | | | ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ | ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● | ○ ○ | | | |
| 25 | | | | | ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ | ○ ○ | ● ● | | | |
| | | | | | ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ | ● ● | ● ● | | | |
| 30 | | | | | | | ○ ○ | | | |

引用図において、連続引用の場合は●が横に並び、継起引用においては縦に並ぶわけである。羅列引用の場合は●が縦に並ぶ。複数会話文引用の実態を明確にするためにそれぞれに囲いをつけた。(注1)

図Ⅰをみると、横囲いと縦囲いがほぼ同数に近くあらわれる様相が一目瞭然であり、図Ⅱ・図Ⅲにおける横囲いの多さとは明らかに違いが看取できる。又、同じく横囲いが多い場合であっても、図Ⅱにおいては横囲いは短かく、図Ⅲにおいては横に長い横囲いが目立つ。又、図Ⅱの縦囲いは、●、すなわち羅列引用が多い。

又、各図の内部においても、場面によって会話文の引用の仕方が違うことも、明らかである。例えば、図Ⅰによると『竹取物語』の発端・かぐや姫発見の場(一)では会話文はほとんど用いられない。単独の会話文は、本稿冒頭に引用した竹取翁の独語である。前半・貴公子求婚の場面(二)と後半・かぐや姫昇天の場面(九)とは、帝の求婚の場面(八)を境に、図の様相が異なっている。(二)と(七)では縦囲いが目立ち、(八)・(九)では横囲いが目立つが、更に細かくみれば、前半・貴公子求婚譚内部においても、「石づくりのみこの仏の御石の鉢」(三)、「阿べのみむらじの火鼠の皮衣」(四)の二者の異質性―他の三者の難題譚の表現とは異なる様相―がはっきりと図上にあらわれている。

すなわち、この引用図によって、複数会話文の引用の実状を、内部状況も含めて総合的に把握することができる。場面による引用状況の変容は、会話文を認定・表現する筆者の表現姿勢の変容を示している。会話文を一まとまりのものとして認識し、それを明確に表現しようとするほど連続引用が多くなるわけで、そういう筆者の態度もしくは意識の変容を、この引用図は明確に把

示していると考えられる。

そう考えてくると、三図を比較して把握できる図上の相違は、ある意味で、三作品の文体上の相違と考えることが許されるのではないだろうか。少なくとも三作品の文体的な特色が図上に示されていると考えることが可能であろう。

全体として会話文●の多い『竹取物語』は、内部的にみると、前半は縦囲いが多く、第七場面を境に、後半は横囲いが多くなる。『源氏物語』においては、会話文は、心話文をなймаぜに引用されていて、図では心話文○が多く、会話文が一まとまりになる場合は、圧倒的に横囲いが多い。『宇津保物語』においては、実に雑然とした様相がみられ、筆者の統一した表現意識に基づく省筆や一括などの秩序づけがほとんど行われていないことがうかがわれる。二重引用●や投げ出し引用●が多く、他の二作品には見られない羅列引用(図においては、□の形で示した。)も四か所までみられる。

同程度の会話文数・会話引用頻度であっても、その引用の様相や構造は大きく異なり、そのことが、文体の違いの一端を担っている。特に複数会話文の一まとまりの引用の場合には、その文体印象に及ぼす効果は大きい。文の長さにおいても、大むね縦囲いは短文の連鎖に、横囲いは長文になりやすい。心話文○、和歌×、消息文△などの混在の様相も又、大きく文体を左右する要素の一つである。そういう特色を右の引用図は全体的に把握、視覚化していると考えられる。

大まかにいって横囲いの多い『源氏物語』型の文章(図Ⅲ)を連続型、縦囲いの多い『竹取物語』型の文章(図Ⅰ)を継起型、羅列引用を持ち、雑然とあらゆる引用文が混在・羅列される『宇

津保物語』型の文章（図Ⅱ）を羅列型と称したいと思うが、尚、数多くの引用図を作成し、比較検討した上で命名するべく、文章類型——すなわち、文体の型——の名称については、ここでは粗案を提するにとどめたい。

八、

以上、(1)複数の会話文を一まとまりの表現として一括引用する引用形式に二種四類の類型（A並列型Ⅱ連続引用・継起引用・羅列引用、B重層型Ⅱ重引用）があることを見出し、(2)それぞれの引用形式を持つ固有の文章特色（文体）と、そこに反映されている筆者の表現意識の特徴を確かめ、(3)平安和文における複数会話文の引用の実態を探るべく、『竹取物語』『宇津保物語』（忠こそ）『源氏物語』（末摘花）を資料として引用図を作成・比較して、複数会話文の引用形式の様相の面から、それぞれの文章には、継起型、羅列型、連続型とも呼び得る特色を看取できることを確かめた。

会話文の本質から考えて、個々の会話文の引用形式にとどまらず、会話文が複数一まとまりの形で引用されることの意味を考えてみたが、その複数引用の形式が、文章特徴（文体）に大きく関係していることを、引用図を作成することによって、より具体的に把握できたと思う。

心話文の引用形式や、和歌・消息文とのかかわり、更にそれらを組み合わせてゆく表現手法にこそ、作者の表現意識がより一層如実に反映されるであろう。本稿においては心話文として一括した引用文の中にも、様々な複雑な様相がある。今後、更に引用の問題を文体・文章特徴にかかわって解明してゆきたい。

注

1 会話文と文章・文体に関する論文は数多いが主として次の諸論考を参考にした。

(1) 遠藤嘉基『竹取物語の文章と語法』序説——特に対話の文について』（『国語学』6巻5号、昭11）

(2) 塚原鉄雄「会話の引用——竹取物語の場合——」（『国語研究』19号、昭32）

(3) 佐伯楨友『上代国語法研究』（大東文化大学東洋研究所、昭41）

(4) 奥津敬一郎「引用構造と間接化転形」（『言語研究』56、昭43）

(5) 西尾光雄『日本文学史の研究』中古篇、第五章（塙書房、昭44）

(6) 鈴木一雄「源氏物語の会話文」『源氏物語講座』第七巻、有精堂、昭46）

(7) 阪倉篤義『文章と表現』第一章・第四節・第五節（角川書店、昭50）

(8) 山口仲美「竹取物語の文体と成立過程」（共立女子短期大学文科紀要22、昭54）

(9) 柏原司郎『地の文』と『会話文』とは対語か』（『語学文学』18号、昭55）

(10) 渡辺実『平安朝文章史』（東京大学出版会、昭56）

(11) 神谷かをる「引用形式からみた物語文章史」（『日本語学』第2巻第2号、昭58）

本稿の論旨を構築するに際して、参照した文献はおおむね前記であるので、この後に発表されている関係論文は、この際割愛した。

2 『国語学大辞典』（東京堂出版）の「会話文」（塚原鉄雄氏執筆）、「引用」（奥津敬一郎氏、水谷静夫氏執筆）の項、参照。

3 注1(5)西尾論文では、一六八、(7)阪倉論文では、一六一。会話文の認定の仕方により若干の差が生じているが、大勢に影響を与える差ではないと判断する。

4 翁「うれしくものたまふ物かな」と言ふ。「翁、年七十に余りぬ。今日とも明日とも知らず。この世の人は、おとこは女にあふことをす。女は男にあふ事をす。その後なむ門ひろくもなり得る。いかでかさるこ

となくてはおはせん。」かぐや姫のいはく「なむでうさることかし侍らん」と言へば……『竹取』32ページ)

5 これを聞きてかぐや姫は、「さし籠めて、守り戦ふべきしたくみをしたりと、あの国の人を、え戦はぬ也。弓矢して射られじ。かくさし籠めてありとも、かの国の人來ば、みな開きなむとす。あひ戦はんとすとも、かの国の人來なば、猛き心つかふ人もよもあらじ。」翁の言ふやう、「御迎へに来む人をば……(後略)。(『竹取』62ページ)

6 「投げ出し引用」を取り上げるからには、引用動詞の単複、もしくは、会話文に対する位置(上接か下接か)など、従来、個々の会話文の引用形式において取り扱われて来た問題、いわゆる双括引用とか、ク語法とかを問題にすべきではないかという疑問が当然おこる。しかし、実際の文章に即してみると、複数の会話文の一まとまりの引用を全体として、考えるには、前記の諸点は、大きな差異をもたらさない。

「投げ出し引用」も単独例であれば、注4、注5にあげた『竹取物語』の例文の場合のように、前後の引用動詞と場の力に助けられて、さほどの不安定感はなく、地の文の中に位置づけられる。注4、注5の例文は、いずれも、それぞれ継起引用の一部をなしている。

しかし、「投げ出し引用」のみが複数、たてつづけに文章中にあらわれる場合には、無視しがたい特色を持つ、別種の、一まとまりの作り方として認定すべきであろう。羅列引用は、そういう事例を指すものである。

7 羅列引用自体の性格と表現性の特質については、拙稿「宇津保物語の会話引用形式——羅列引用形式について——」(長崎大学教育学部人文科学研究報告、第34号)を参照されたい。

8 拙稿「会話引用形式——平安初期和文における二重引用——」(『日本語学』第2巻第9号、昭58)において定義し、かつその表現性について言及している。

9 注1(1)遠藤論文において、氏は、「流動形」と「句切形」を指摘しておられるが、これは、会話文を引用している地の文自体の切れ続きについての

問題であって、本稿でとりあげている、複数の会話文の一まとまりの引用については、言及しておられない。

10 囲いをつけるにあたっては、一文として、明確にまとまる連続引用を優先した。